

中央区人権啓発
連絡会議だより

こうろ

発行
中央区
人権啓発連絡会議
事務局
中央区総務部
生涯学習推進課
(☎718-1068)

心がモヤモヤ「マイクロアグレッション」 〜私もしてしまうかも？ ほめたつもりの小さな攻撃〜

「お箸の使い方が上手ですね！」
「そうですか。ありがとうございます。」
「……。」
友達の紹介で会った外国人との会話のひとコマです。

こちらはほめたつもりですが、相手は微妙に困ったような顔で、あまり嬉しそうではありません。そんな経験はありませんか？

悪気や不快にさせる意図は全くないけれど、何気ない言葉や行動で相手を微妙に傷つけてしまっているのかもしれない。この「マイクロアグレッション」(小さな攻撃)といいますが、冒頭の場面、言われた側は「日本に住んで随分長いんだけどなあ……。」と戸惑い、モヤモヤしているのかもしれない。

この「マイクロアグレッション」は、誰でもしてしまう可能性があります。それは、私たちには子どもの頃から形成されてきた「無意識の思い込みや偏見(アンコンシャス・バイアス)」というものがあつて、外国の人に「お箸が上手ですね」とほめる心には、「外国の人はお箸をうまく使えない」という、自分でも気づかないうちに根付いてしまった偏りのある感じ方、考え方があつたのかもしれない。このような思い込みは、誰もが持っているもので、自然にそれが言葉や行動に出てしまい、「マイクロアグレッション」にな

ってしまふ、というわけですね。このような無意識の思い込みや偏見を減らすことにつながるような動きが、近年みられるようになりまふ。たとえば、多くの人が見るテレビCM(コマーシャル)。調べてみると、1970年代から90年代には、洗剤、掃除機、洗濯機、炊飯器など、家庭用品のCMに登場するのは、ほとんどが女性でした。子どもの頃から、そのようなCMを毎日のように見て育つた世代には、無意識のうちに「家事は女性の仕事」という思い込みや偏見が育つていふのかもしれない。

そのことが、「男性なのに家事をするなんて偉いね」といった、言われた側が戸惑いする「ほめ言葉」を生む元になるのです。では、最近はどうでしょう。男性が起用された家庭用品のCMをよく見かけるようになってきたと思いませんか。

これらを見て育つ子どもたちには、「家事は女性がするもの」という意識は育ちにくいかもしれませんが。それでは、悪意のないひとことがマイクロアグレッションにならないようにするには、どうしたらいいのでしょうか。

まずは「そもそも自分には、多かれ少なかれ、無意識の思い込みや偏見があるのだ」ということを受け止めてみてはどうでしょう。そのうえで「自分はマイクロアグレッションをしてしまう可能性がある」と思っておくのです。そうすると、会話の後に「もしかしら、今のはマイクロアグレッションだったかもしれない」という気付きにつながり、「次からは気を付けよう」と意識することができまふ。

「委縮して何も言えなくなる」と感じるのかもしれない。でも、「マイクロアグレッションをしてはいけない」と構える必要はありません。冒頭の場面でもそうですが、同じ言葉でも、その受け止め方は、受け手によって、またお互いの関係性によって、ほめ言葉にも、モヤモヤ言葉にも変わります。

大切なのは、「言っただけに捉われず、自身の気つきに引き合い、少しずつ減らしていこう」と努めることだと考えまふ。その積み重ねが、人間関係をスムーズに、そして絆やつながりを強く豊かにしていくことにつながるのではないのでしょうか。相手のことを理解し、お互いの関係性を深めることで、きっと優しく素敵な会話が生まれることまふ。



中央区人権啓発連絡会議 主催 令和4年度 中央区人権を考えるつどい

「一人芝居先生のメッセージ」 演者 福永 宅司さん
トークと笑って泣いての一人芝居「学校」 (山田洋次監督作品より)

令和4年9月20日(火)、中央市民センターにおいて、「中央区人権を考えるつどい」を開催しました。



【福永宅司さん】

元小学校教諭で、現在はフリースクールの運営や、「一人芝居活動家」として活躍の福永宅司さんに、前半はユーモアたっぷりの「トーク」、後半はお一人で何役も演じる白熱の「一人芝居」を届けていただきました。

「ぬくもりのある人権のまじりぐりを目指して」と題したトークでは、自宅を拠点に開設した、不登校の子どもたちを支える「学校」。さまざまな理由で学

ぶるフリースクール「みんなの学び館」の活動を紹介されました。また、「人権を身近なところから考えてみましょう。たとえば、家族に『ありがとう』と伝えてい

第51回 福岡市人権を尊重する市民の集い

働く幸せ実現のために「社員から教わったこと」
日本理化学工業株式会社 代表取締役社長 大山 隆久さん

令和4年12月7日(水)、福岡市人権尊重行事推進委員会主催の「人権を尊重する市民の集い」(中央市民センター)において、日本理化学工業株式会社代表取締役社長の大山隆久さんが講演されました。



【大山隆久さん】

彼らが生産ラインのすべてを担っており、彼ら抜きでは会社は成り立ちません。「障がい者雇用は大変？」相手の理解力に合わせることを大事にしています。

自分が入社したときから、私には、「障がい者雇用を続けていたら会社の未来はない」と思っていました。それは間違いでした。

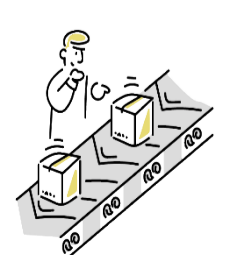
自分が入社したときから、私には、「障がい者雇用を続けていたら会社の未来はない」と思っていました。それは間違いでした。



き人生と学びを求めた姿、その死を通じて「人の幸せとは何か」を語り合います。

「いのさん」の人生や仲間たちの想いから、自分の人生を振り返り、今まで、そしてこれからの幸せについて考えた方も多かったことまふ。

最後に、福永さんは「知らないことが差別につながる。だから学びが必要。人をこうだと決めつけず、物事を多角的にみることでできる知識が必要。そうすることまふ差別がなくなり、私たちのまぢも住みやすくなつていくはずだ」と呼びかけました。



人間は「共感」といって、みんな人のために役立つことに幸せを感じるまふ。職場での「ありがとう」が、自分の存在意義を確認し、働く幸せの実感につながつていくことを教えてくれました。

【目指すべき社会の姿】
当社の取組みの説得力を高めるうえで安定した経営を続け、当社ができていふことを社会に発信することが我々の役割だと思つていふ。

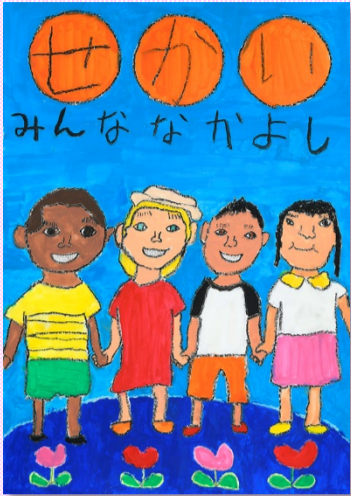
多くの人が社会や誰かの役に立ち、「ありがとう」と言われる社会、誰もが必要とされる社会を目指したいと思つていふ。

自分が入社したときから、私には、「障がい者雇用を続けていたら会社の未来はない」と思っていました。それは間違いでした。

自分が入社したときから、私には、「障がい者雇用を続けていたら会社の未来はない」と思っていました。それは間違いでした。

人権尊重週間 入選作品

12月4日から10日の人権尊重週間にあわせて、福岡市が募集した標語やポスターのうち、中央区内の入選作品をご紹介します。(順不同)



当仁小学校 2年 上谷チャールズさん



高宮小学校 3年 李天心さん



当仁小学校 3年 横尾望七さん



赤坂小学校 6年 湯元風羽南さん



小笹小学校 3年 葛西琴さん



赤坂小学校 4年 園和香那さん



草ヶ江小学校 6年 下川二葉さん



赤坂小学校 6年 相浦蓮介さん

相談しよう
悪いのは
いじめられてる
あなたじゃない
警固中学校 3年 今中あず沙さん

イジメも差別も
見てみぬふりする
君は共犯者
草ヶ江小学校 6年 大和こはねさん

文字を打つ
あなたの指が
凶器だよ
当仁小学校 5年 宮崎理咲子さん



赤坂小学校 6年 小山夏輝さん



赤坂小学校 6年 羽迫大展さん

中央区人権啓発連絡会議
構成機関・団体(順不同)

- 中央区人権啓発連絡会議は、部落差別をはじめとするあらゆる差別の解消を目指し、「中央区人権を考えるつどい」の開催や街頭啓発の実施、広報紙「こうろ」の発行など、人権を尊重し人の多様性を認め合う明るく住みよいまちづくりの実現に向けて活動しています。
- 中央区校区自治協議会等代表者会
- 中央区人権啓発地域推進組織(校区地区人権尊重推進協議会 14 団体)
- 中央区体育振興連絡会
- 中央区交通安全推進協議会
- 中央区青少年育成連絡会
- 中央区民生委員児童委員協議会
- 中央区老人クラブ連合会
- 中央区公民館長会
- 中央区小学校長会
- 中央区中学校長会
- 中央区中学校PTA連合会
- 中央区子ども会育成連合会
- 福岡市身体障害者福祉協会中央区支部
- 中央保護区保護司会
- 中央区男女共同参画連絡会
- 中央区役所

編集後記

「コロナ禍」で日常が大きく変わったことのひとつに「距離」があります。三密回避による物理的距離だけでなく、親しい人と会えないことで、「心の距離」が生じてしまいました。コロナ差別や孤独、孤立などの問題を考えると、人のつながり、ふれ合い、絆が、生きる支えになる大事なものだということに、改めて気づかされました。「コロナ禍」の生活も4度目の春を迎え、少しずつですが、以前の日常を取り戻しつつあります。引き続き、感染対策に気を付けながら、長く会えずにいる大切な人や、親しい仲間、友人たちとの距離が縮まっていくことを心から願っています。「そういえば、ご先祖様にもご無沙汰だな」と思い、先日お墓参りへ。コロナで日が空いたことを詫言いつつ、ろうそくの灯を消そうと手であおいだとき、指を墓石に強くぶつけてしまいました。「先祖への無沙汰にコロナは関係ないぞ」と叱られたのかもしれない。改めて無沙汰を詫言いつつ、周囲の人やものとの「距離」に気を付けなければ、と文字どおり「痛感」を付けた出来事でした。